

岡山大学教育学部教育実践力向上カリキュラムにおける 初等家庭科内容基礎の実践

— 2024 年度実践結果と教科内容構成力の継続的育成の検討 —

篠原 陽子^{*1} ・ 久成三有紀^{*1} ・ 森 千晴^{*1} ・ 李 璟媛^{*1}

岡山大学教育学部において教育実践力向上カリキュラムが始動し 2 年目となる 2024 年度「初等家庭科内容基礎」の実践について、学生のアンケート結果から新しいカリキュラムにおける授業評価と教科内容構成力育成の課題を検討した。授業の到達目標に係る学生の自己評価は高く、教科内容構成要素との関係から、教科内容構成力のプロセス①に係る基礎的な力は獲得できていた。授業に意欲的に取り組んだグループは授業全体の満足度が高かった。授業後は家庭科の教育内容を指導者の視点から認識できている学生が多く見られ、指導法で学ぶ家庭科の授業づくりに繋がる学修となっていることが分かった。

キーワード：教科内容構成力，小学校教員養成，家庭科，教育実践力向上カリキュラム

I. 研究背景

1. これまでの教科内容構成研究と新しいカリキュラム

(1) 岡山大学教育学部コア・カリキュラム

2006 年度から実施された教員養成コア・カリキュラムでは、「実地教育」を核とした「教育実践理解科目」「教育実践基礎力養成科目」「教育実践応用力養成科目」により、①学習指導力、②生活指導力、③コーディネート力、④マネジメント力の 4 つの教育実践力の育成が目指されてきた（図 1）。2010 年度には教職実践演習を加えた Ver. 2 にアップデー

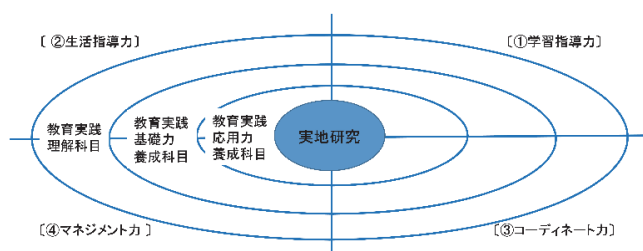


図 1 教員養成コア・カリキュラム¹⁾

Implementation of a Curriculum to Improve Educational Practice in Okayama University: Results in 2024 and Continuous Development of “Skills of Subject Contents Organization” in “Primary Education Home Economics Education Basic Content”

^{*1} 岡山大学学術研究院教育学域，700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1, Yoko SHINOHARA, Miyuki HISANARI, Chiharu MORI, and Kyoungwon LEE, Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

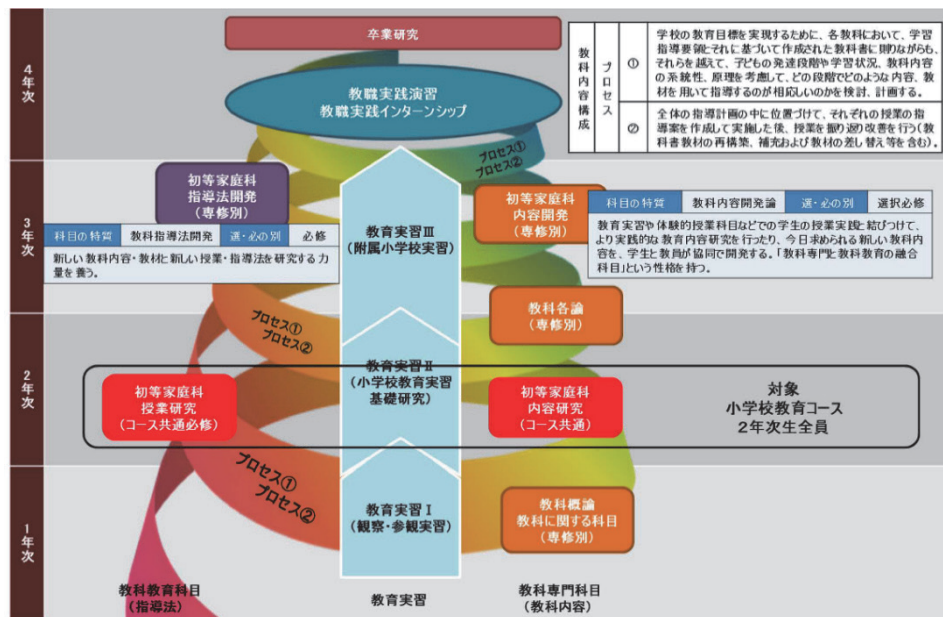


図2 教員養成コア・カリキュラムにおける教科内容構成力の育成²⁾（小学校教育コース）

トされた。この中で教員養成における課題解決を図るための先進的な取り組みとして、教科構成の一貫したプロセスを学ぶシステムを保証するカリキュラム¹⁾が開発された。教科内容構成力の育成を目指して、図2に示すように学部全体のカリキュラムを通して4年間で積み上げながら、次に示す教科内容構成プロセス①②^{1,3)}が学修されるよう設計された。

（教科内容構成プロセス①）

学校の教育目標を実現するために、各教科において学習指導要領とそれに基づいて作成された教科書に則りながらも、それらを越えて子どもの発達段階や学習状況、教科内容の系統性、原理を考慮して、どの段階でどのような内容、教材を用いて指導するのが相応しいのかを検討、計画する。

（教科内容構成プロセス②）

全体の指導計画の中に位置づけて、それぞれの授業の指導案を作成して実施した後、授業を振り返り改善を行う（教科書教材の再構築、補充および教材の差し替えを含む）。

家庭科に関しては、2年次から初等家庭科授業研究、初等家庭科内容研究の順で学修する仕組みになっている。

（2）家政教育講座コア・カリキュラムの実施（小学校）

このカリキュラムの中で、家政教育講座では2010年度から小学校・中学校教育コースともに「卒業研究」をコアにした教員養成コア・カリキュラムを構築し、家庭科教育学・教科内容学（家族関係学・被服学・食物学・住居学）・教育実習を通して、前述の①学習指導力の強化を図ってきた。初等家庭科授業研究、初等家庭科内容研究の実施にあたっては、教科内容構成プロセス①②をどのように教えるか、課題を担当者間で共有し、学生の教科内容構成力が高まる授業について共同研究に取り組んできた⁴⁻⁶⁾。

（3）2023年度新カリキュラムにおける初等家庭科内容基礎

2023年度入学者からは、高度な教育実践力をもつ小学校教員の養成という理念に基づいて新しいカリキュラムが実施されている。教育実践力向上カリキュラム構想図^{4,7)}を示す

	1 学期	2 学期	3 学期	4 学期
4 年生	指導法開発Ⅱ (2) (繰り返し履修)：授業研究マネジメント (3 年次指導法開発Ⅰと同じ科目)		教職実践演習 (2) (必修)	
	教育実習Ⅲ：副実習		教職実践インターンシップ (1) (必修)	
3 年生	指導法開発Ⅰ (2) (必修)：教材・単元開発と学習評価 (2 単位×国算理社英音図体家から 1 教科)		内容開発 (2) (必修)：教材・単元開発 (2 単位×国算理社英音図体家から 1 教科)	
	教育実習Ⅱ (4)：主実習〔観察 (2 学期 1 週間) + 教壇実習 (3 学期 3 週間)〕			
	教育実習基礎研究 (2)：実習事前指導 (学習指導計画, 模擬授業)		実習事後指導	
2 年生	内容構成論Ⅰ (6) (必修)：教材分析 (1 単位×国, 1 単位×算, 1 単位×理社英から 2 教科, 1 単位×音図体家から 2 教科)		内容構成論Ⅱ (2) (必修)：単元・カリキュラム分析 (1 単位×国算理社英音図体家から 2 教科)	
	指導法Ⅰ (10) (必修)：教科の各領域の教材論と指導法 (1 単位×10 教科)		指導法Ⅱ (2) (必修)：教科の教材・単元デザイン (1 単位×国算理社英音図体家から 2 教科)	
	教育実習Ⅰ (1) (1・2 学期 2 日間 + 3 学期 2 日間)：授業観察・分析の実践			
	教育実習基礎演習 (1)：授業の観察力・分析力の伸長			
1 年生	内容基礎 (10) (必修)：教科を構成する基礎的内容 (1 単位×10 教科)		指導法基礎 (10) (必修)：教科の目標, 子どもの実態を踏まえた指導法 (1 単位×10 教科)	
	教職実践入門セミナー (1)：教育的課題について主体的協働的に学び合うことを通じて、教員をめざす自らの学びの方向性を確認する		教育実習基礎論 (1)：授業づくりの基礎 授業観察・分析法	

図3 教育実践力向上カリキュラム構想図^{4,7)} (小学校教育専攻)

(図3)．教育実習を軸とし大学の授業で培った知識や思考力等が連動するカリキュラムとなり、複数教科を指導する小学校教員の特性に応じたスキルをもった「授業研究推進力」を有する教員の育成⁷⁾が目指されている。履修学年、履修順序、履修方法が新しくなり、家庭科は、1年次初等家庭科内容基礎 (1単位)、初等家庭科指導法基礎 (1単位) の順で全員が履修する。2年次からは複数教科の中から内容構成論ⅠⅡを選択して履修する。

新しいカリキュラムが目指す教育実践力向上と授業研究推進力の育成のためには、教科内容構成の視点から授業を理論的・体系的に捉える力が不可欠であると考え、初等家庭科内容基礎では、教科内容構成プロセス①の考え方を新しい形で取り入れた。履修の進行とともに、2年次から内容構成論ⅠⅡ、内容開発等の内容科目、加えて指導法科目、教育実習科目等で教育実践力の向上と教科内容構成力が継続的に育成できるよう計画している。高度な教育実践力を有する小学校教員の養成は、学部カリキュラム全体を通して図られるものであるため、1年次導入段階の「内容基礎」では、教科の理解につながる授業内容とした。

Ⅱ. 研究目的と方法

1. 研究目的

教育実践力向上カリキュラムが始動し 2 年目となる 2024 年度「初等家庭科内容基礎」の実践結果を整理し、教育実践力向上カリキュラムにおける授業の評価と教科内容構成を取り入れた授業実践の課題について、学生のアンケート結果に基づいて検討したい。

2. 研究方法

(1) 「初等家庭科内容基礎」の 2024 年度実施概要

授業の到達目標と概要は全教科で小学校学習指導要領に基づいた内容科学の提供「教科を構成する基礎的内容」に統一が図られた (図 3, 表 1)。授業計画を表 2 に示す。平成 29 年告示小学校学習指導要領⁸⁾で家庭科の内容は「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」に編成された。この学習指導要領と家庭科教科書を概観しながら、児童が家庭科を学ぶ意義や教育内容の編成について理解する。領域間の繋がりや小・中・高校の繋がりや基盤学問との関係を学び、各領域で教科内容構成プロセス①の子どもの発達段階

表 1 初等家庭科内容基礎の到達目標と概要

○授業のテーマ及び到達目標 この授業は、小学校家庭科の教科内容を指導するための基礎として、教育内容と専門的知見との繋がりを学修するものである。到達目標は、小学校家庭科における教育内容の基礎的な概念や小学校で学習する意義、授業を行う上での専門諸科学との繋がりを理解し、小学校家庭科の指導に必要な基礎的知識を身につけることである。
○授業の概要 学習指導要領や教科書の全体像を概観しながら、その背景となる専門諸科学のおもしろさや学問的な繋がりとという視点から、小学校家庭科の学習の意義を探究する。また小学校家庭科の各領域間の内容的繋がりを、中学校以降の学習との繋がりにについても学ぶ。

表 2 初等家庭科内容基礎の授業計画

	内 容	
	I. 小学校家庭科の教育内容とその学問基盤となる専門諸科学	
1	第 1 回 小学校家庭科の学習指導要領の各領域と教科書の内容編成について 第 2 回 各領域の教育内容と「家政学」との繋がりを学ぶ意義	(篠原)
2	II. 小学校家庭科の教育内容を支える専門的背景 (衣食住の生活領域) なぜ衣生活・住生活について学ぶのか 第 3 回 衣生活領域の教育内容と基盤学問「被服学」との関係 第 4 回 住生活領域の教育内容と基盤学問「住居学」との関係	(篠原)
3	第 5 回 なぜ食生活について学ぶのか 第 6 回 食生活領域の教育内容と基盤学問「食物学」との関係	(久成)
4	第 7 回 健康・快適・安全の視点でみる食生活領域の教育内容 第 8 回 生活文化の継承の視点でみる食生活領域の教育内容	(久成)
5	(家族・家庭生活領域) 第 9 回 なぜ家族について学ぶのか 第 10 回 家族領域の教育内容と基盤学問「家族関係学」との関係	(李)
6	第 11 回 なぜ家庭生活について学ぶのか 第 12 回 家庭生活領域の教育内容と基盤学問「家庭経営学」との関係	(李)
7	(消費生活・環境領域) 第 13 回 なぜ消費生活・環境領域を学ぶのか 第 14 回 消費生活・環境領域の教育内容と ESD/SDGs	(久成)
8	試験と振り返り	

に応じた教育内容の系統性、原理の基礎を理解する。これまでは学生が学習指導要領ならびに教科書の記述分析を行い、各領域の教育内容を一覧にした分析表を作成していたが、履修学年と学修時間を考慮し、担当者が用意したワークシートに従って簡単な分析表を完成させ、その結果を学生が発表した。担当者が小学校の教育内容とその構成について解説を加えた。2024 年度は 1 学期 1 年次生 77 人、2 学期 1 年次生 76 人が履修した。

(2) 2024 年度「初等家庭科内容基礎」アンケート集計

授業の到達目標に基づいた自己評価 6 項目（5 件法）、家庭科の履修に関する質問 3 項目（5 件法と理由を記述）を併せて 9 項目について授業最終回にアンケート調査した。アンケートの目的を説明し、成績評価には無関係であることを回答シートに記載し口頭で説明した。回答に同意した履修者が Google フォームで回答した。1 学期 6 月 4 日 実施 59 人、2 学期 7 月 30 日実施 72 人、計 131 人の回答が得られた。他に岡山大学授業評価アンケートで 131 人の回答が得られた。これらを単純集計し、記述分析には KH Coder 3 を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

授業シラバス到達目標に基づく自己評価項目と教科内容構成に関する要素との関係を明確にした後、自己評価アンケートと家庭科の履修に関するアンケート結果を示す。

1. 授業シラバス到達目標に基づく自己評価アンケートの作成と結果

初等家庭科内容基礎のシラバス到達目標から自己評価アンケート 6 項目を作成した。これにより学生の到達度が把握可能となる。一方、教科内容構成要素³⁾は、プロセス①とプロセス②に関連する要素から設定されている。これらの対応関係を表 3 に示す。内容基礎の到達目標は、プロセス①の主として 2～5 の 4 項目に対応していると見られる。「Q1. 児童が小学校家庭科を学習する意義を理解できた」は全体的に係るものとし表外とした。

授業の到達目標に基づく自己評価アンケートの結果を図 4 に示す。「1. 児童が家庭科を学習する意義」は 99% の学生が理解できた。「2. 家庭科の専門的科学的つながり」は 96%、「3. 家庭科の指導に必要な基礎的知識」は 93%、「4. 家庭科の各領域間の内容的繋がりを」は 97%、「5. 中学校以降の学習とのつながり」は 93% の学生が理解できた。「6. 学習指導要

表 3 初等家庭科内容基礎のシラバス到達目標と教科内容構成要素との関係

教科内容構成に関する要素 ³⁾		初等家庭科内容基礎のシラバス到達目標に基づく 自己評価アンケート項目
1. 学校の教育目標との関係	ブ ロ セ ス ①	
2. 学習指導要領・教科書との関係		Q6. 学習指導要領や教科書の全体像をつかむことができた
3. 子供の発達段階や学習状況に応じた教科内容編成		Q5. 中学校以降の学習との繋がりについて理解できた
4. 教科内容の系統性と原理		Q4. 小学校家庭科の各領域間の内容的繋がりを理解できた
5. 教科指導における教科専門知識の再構成		Q2. 小学校家庭科の授業を行う上で専門諸科学との繋がりを理解できた Q3. 小学校家庭科の指導に必要な基礎的知識を身につけることができた
6. 全体のカリキュラム・指導計画における各授業の位置づけ	ブ ロ セ ス ②	
7. 各授業の学習指導案の作成		
8. 作成した学習指導案による授業実践		
9. 実施した授業の振り返りと改善		
10. 教科専門知識と教材研究・教材開発		

領と教科書の全体像」は 91% の学生が掴むことができた」と回答した。内容基礎の到達目標の自己評価が高いことから、教科内容構成要素 2～5 に関する基礎的な内容が理解できたものと考えられる。

2. 家庭科の履修に関する質問

次に、家庭科の履修や意識・態度を把握するために 3 つの質問をした。「Q7. 2 年次に小学校家庭科内容構成論Ⅰ（教材分析）や内容構成論Ⅱ（単元・カリキュラム分析）を履修したいと思う」「Q8. 将来は教師になりたいと思う」「Q9. 指導する立場から小学校家庭科を学修して、家庭科のイメージや考え方が変化した」の回答結果を図 5 に示す。

(1) 「初等家庭科内容構成論ⅠⅡを履修したいと思う」

新カリキュラムでは 2 年次に内容構成論ⅠⅡを選択できるが、履修肯定派が 37%, 消極派が 32% で、積極派の理由は「家庭科が面白いと思ったから／もっと内容を詳しく知りたい」で、消極派の理由は「まだ決めていない／他に履修したい科目がある」であった。

(2) 「家庭科のイメージ・考え方が変化したと思う」

次に、内容基礎で「家庭科のイメージ・考え方が変化したと思う」は肯定派が 90%, 否定派が 6% であった。肯定派の理由は「教える立場で新しい内容を学べたから／学習指導要領や教科書の構成を学んだから／各領域の繋がりや小中高校の内容の繋がりを知ったから」等指導者の視点からの記述が見られた。否定派は「小学校で受けた家庭科と大きく変わらなかったから」という理由をあげたことから、家庭科について指導者の視点ではなく、学習者の視点で捉えている傾向がみられた。

家庭科のイメージが「変化した・やや変化した・どちらでもない・あまり変化していない・変化していない」に分けてその理由を分析した共起ネットワークを図 6（最小出現数 2, Jaccard 係数上位 60 位）に示す。「家庭科・知る・学ぶ」が中心の話題となり、肯定派の 2 グループは「授業・分野・思う・理解・受ける」が共通し、「指導する立場から授業を受けると子供たちに何をどのように教えるのか考える授業は面白かった」「教師の視点から今まで自分が受けてきた家庭科の授業を振り返ることができた」など指導者側に立つ意識が見て取れた。

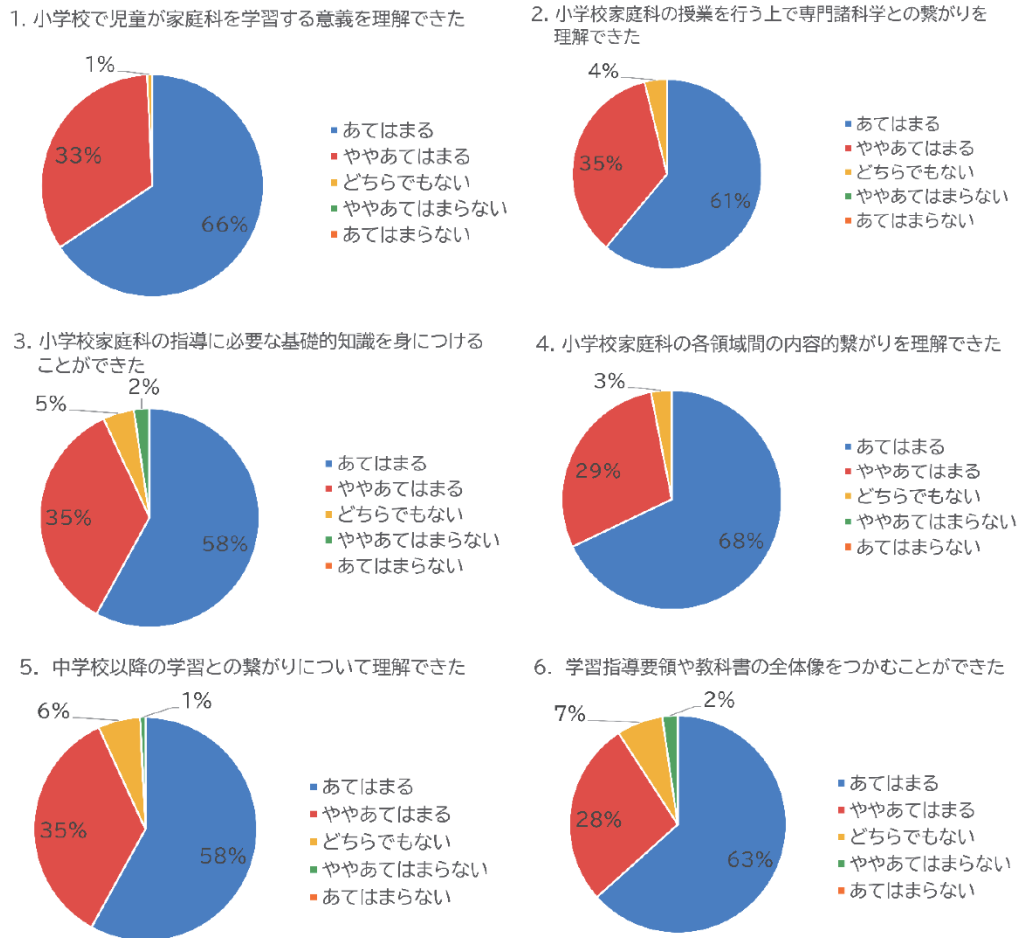


図 4 「初等家庭科内容基礎」授業到達目標の自己評価 (N=131)

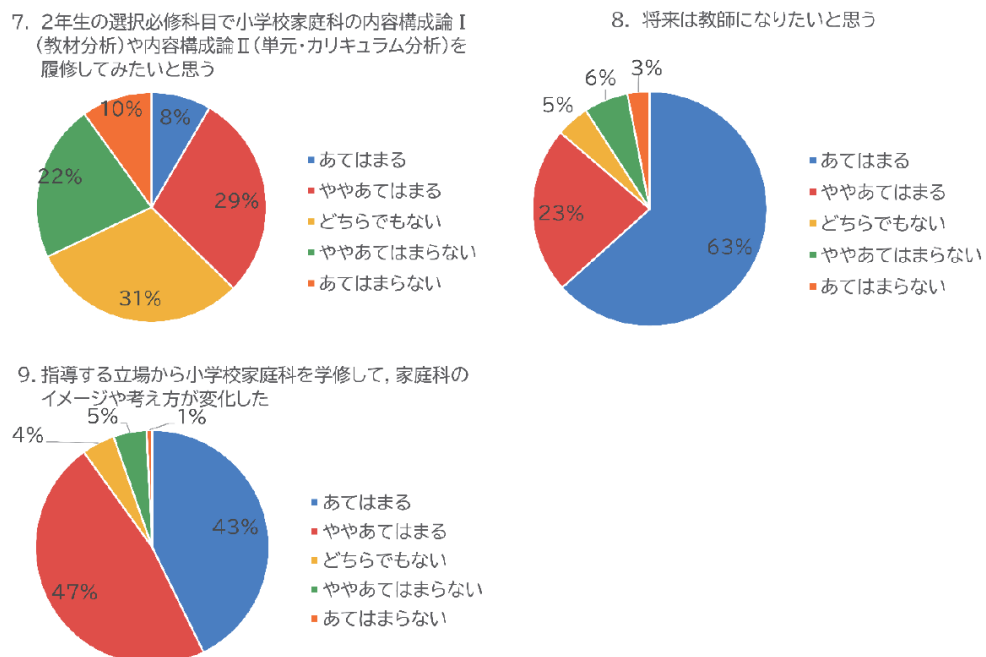


図 5 「初等家庭科内容基礎」履修後の意識 (N=131)

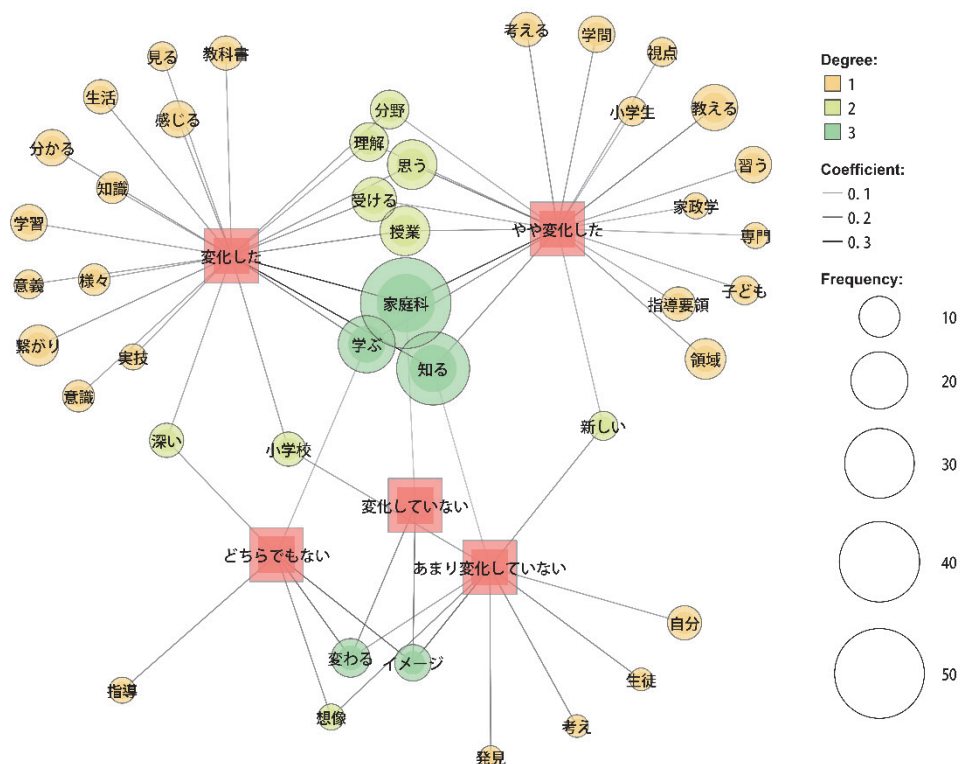


図 6 履修後に家庭科のイメージや考え方が変化したと思うか (N=131)
(KH coder ; 最小出現数 2, Jaccard 係数上位 60 位で描画)

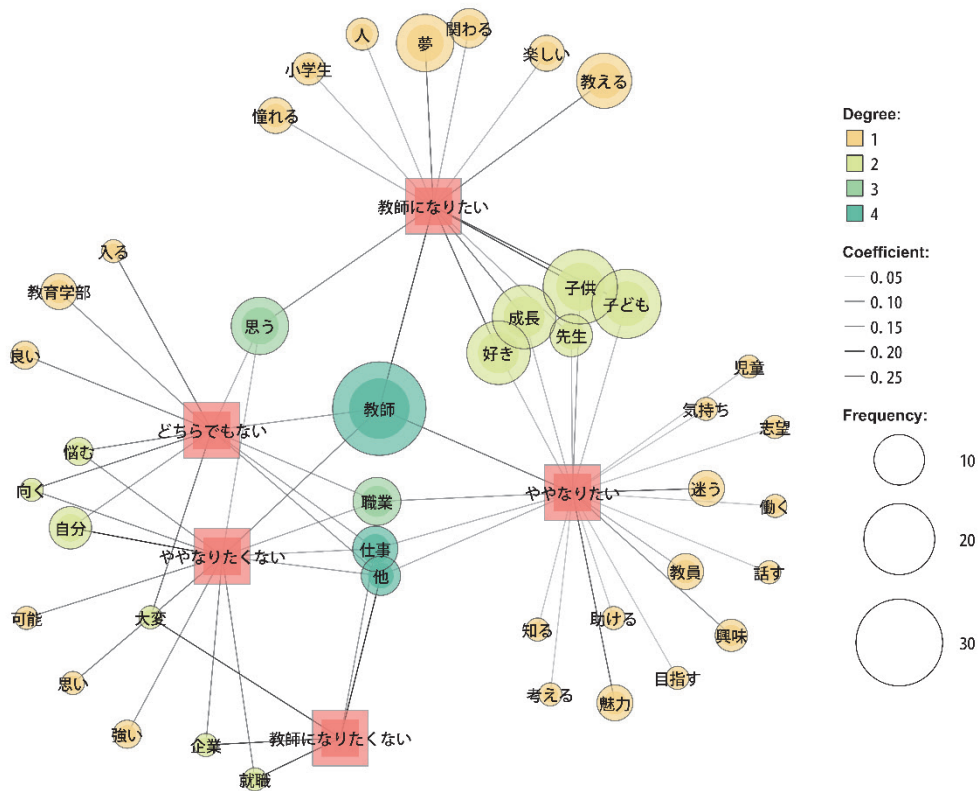


図 7 将来は教師になりたいと思うか (N=131)
(KH coder ; 最小出現数 2, Jaccard 係数上位 60 位で描画)

(3) 「将来, 教師になりたいと思う」

肯定派が 86%, 消極派が 9%であった。肯定派の理由は「教師になるのが夢だから／学ぶ楽しさを教えたいから」で、消極派の理由は「他にやりたい仕事がある／企業に就職したい」であった。「教師になりたい・やややりたい・どちらでもない・あまりなりたくない・なりたくない」それぞれの理由の頻出語の共起関係を図 7（最小出現数 2, Jaccard 係数上位 60 位）に示す。全体では「教師」が中心話題になり、特徴語として、肯定派は「子供・成長・好き・先生」が共通し、「子供が好き／子供の成長を支えたい」等子供を意識した記述が多くみられた。消極派は「自分・大変・企業」等、自分の視点からの仕事・職業と捉えていた。

3. 岡山大学授業評価アンケートの結果

2024 年度授業評価アンケートの結果を表 4 に示す。Q10 では 75～94%の学生が意欲的に取り組み、Q11 では 66～88%の学生が授業全体に満足したと回答した。平均値を見ると、授業全体の満足度が高い 2 学期の学生は、自分は授業に意欲的に取り組んだと高く評価していた。このことから学生が能動的に参加し意欲的に取り組めるよう、引き続き、授業を工夫していきたい。

表 4 2024 年度「初等家庭科内容基礎」授業評価アンケート結果（N=131）

アンケート項目	1学期(回答 65 人)	2学期(回答 66 人)
10 あなたは、この授業に能動的に参加し、意欲的に取り組みましたか。	平均 4.1/5.0 1. 全く意欲的に取り組まなかった(0%) 2. あまり意欲的に取り組まなかった(3%) 3. どちらともいえない(22%) 4. やや意欲的に取り組んだ(38%) 5. 非常に意欲的に取り組んだ(37%)	平均 4.5/5.0 1. 全く意欲的に取り組まなかった(0%) 2. あまり意欲的に取り組まなかった(0%) 3. どちらともいえない(6%) 4. やや意欲的に取り組んだ(38%) 5. 非常に意欲的に取り組んだ(56%)
11 この授業全体に対するあなたの評価(満足度)を教えてください。	平均 3.9/5.0 1. 非常に悪い(0%) 2. 悪い(6%) 3. どちらともいえない(28%) 4. 良い(32%) 5. 非常に良い(34%)	平均 4.4/5.0 1. 非常に悪い(0%) 2. 悪い(0%) 3. どちらともいえない(11%) 4. 良い(35%) 5. 非常に良い(53%)
12 その他、この授業について、「優れている」と思う点など、詳しく伝えたいことがあれば、以下に記載してください。	・授業スライドが非常にわかりやすかった	・日常に大きく関与する家庭科について学べてよかった ・それぞれのつながりをすごく感じながら学べた授業であるように感じた

4. 「初等家庭科内容基礎」領域担当者の考察

(1) A 家族・家庭生活領域

家族・家庭生活領域では、学習指導要領と教科書の編成を概観するとともに、家族・家庭生活の変化に伴う指導上の配慮について確認した。小・中・高等学校における学習内容を確認したことで、発達段階に基づく教育内容の系統性と体系化を理解できたと思われる。

(2) B 衣食住の生活領域

衣生活・食生活・住生活領域では、教科書を概観し学生がワークシートを使って小学校の教育内容を体系化したことにより、教育内容の編成を自分で考察し、指導に必要な専門的な知識の基礎を獲得することができたと考える。

(3) C 消費生活と環境領域

消費生活・環境領域では、売買契約や SDGs などの学習事項を説明し、食生活領域との関連性を確認した。学習内容を領域横断的に捉えることで、学生は家庭科特有の「身近な」視点で消費生活・環境を学ぶ意義とその本質を見出すことができたと考える。

以上より、教育実践力向上カリキュラム導入段階の内容基礎において、学生は小学校家庭科の教育内容とその内容編成の基礎を理解することができた。家庭科の授業構成の原理や授業への展開は、1年次3・4学期の指導法基礎、2年次の指導法ⅠⅡへと続く。

5. 指導法基礎への展開

前述の「内容基礎」における学修から、学生は各内容領域について、教科書や学習指導要領解説等の分析を通して、自身の学習者としての経験を振り返るとともに、小学校家庭科の学習内容の意義を捉え直すことができたと考える。この成果を踏まえ、指導法基礎においては、各内容領域をつなぐ視点として、生活の営みに係る見方・考え方（協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築）を中心に授業を構成し、家庭科という教科の本質的な意義や教科の独自性、育成する資質・能力への理解を深められるよう工夫した⁹⁾。図3で示されたように、新カリキュラムでは1年次に必修科目として各科「内容基礎」と「指導法基礎」が設定され、これまでのカリキュラムにおける教科教育から教科内容への学修展開と逆転していることが特徴として挙げられる。学習者としての教科の捉えは学習内容に依存することから、「指導法基礎」の前に「内容基礎」を履修することで、学習者から指導者への視点の転換が円滑に進むのではないかと推察した。

IV. まとめと課題

(1) 結論

教育実践力向上カリキュラムの導入段階に設けられた初等家庭科内容基礎の実践結果を学生のアンケート調査の結果からまとめた。授業シラバスの到達目標に係る学生の自己評価は高く、教科内容構成要素との関係から、教科内容構成力のプロセス①に係る基礎的な力は獲得できていると考える。授業後は家庭科の教育内容を指導者の視点から認識できている学生が多く見られた。これらは内容基礎の学修で得られた成果であり、次の指導法基礎で学ぶ授業の原理や授業づくりへと繋がる学修となっていることが分かった。

(2) 課題

新しいカリキュラムは現在3年次生まで進んでおり、選択制で2年次「初等家庭科内容構成Ⅰ」（教材分析）、「初等家庭科内容構成Ⅱ」（単元・カリキュラム分析）、3年次「初等家庭科内容開発」（教材・単元開発）と続く。内容構成Ⅰは2024年度45人、2025年度は41人が履修している。続く内容構成Ⅱの履修者はいなかった。4年間の教育実践力向上カリキュラムの成果と課題を体系的に評価するために、初等家庭科の授業を追跡する必要がある。どのように学生の教育実践力向上に繋げるか、引き続き、内容科目と指導法科目との連携により、実践研究を進めていきたい。

参考・引用文献

- 1) 佐藤園, 岡崎正和, 宇野康司, 斉藤夏来, 土屋聡, 尾島卓, 三島和剛, 後藤大輔, 佐藤大介, 高塚成信 (2018) 岡山大学教育学部における教員養成のための「教科内容構成」研究—小・中学校教員養成カリキュラムにおける教科内容構成の展開と評価—, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録第167号, 79-89
- 2) 佐藤園, 河田哲典, 李環媛, 関川華, 篠原陽子 (2022) 岡山大学教育学部家政教育講座における初等家庭科授業研究・内容研究の実践と「教科内容構成力」の育成—小学校教員養

成における教科教育と教科内容を統合する授業内容の構築―，岡山大学大学院教育学研究科研究集録第 179 号，105-112

- 3) 宮本浩治, 桑原敏典, 佐藤園, 篠原陽子, 高瀬淳, 土屋聡, 高旗浩志, 加賀勝, 尾上雅信 (2018) 教育実習をコアにした教員養成教育カリキュラムの開発―教員養成教育認証評価の受審を通して―, 日本教育大学協会研究年報 第 36 集, 33-45
- 4) 佐藤園, 篠原陽子 (2012) 教科教育・教科内容・教育実習の総合を目指す中等学校教員養成家庭科カリキュラム構築の試み―教員養成の課題としての「教科教育と教科専門を架橋する教育研究領域」確立の視点から―, 日本教科教育学会誌, 第 35 巻第 2 号, 19-30
- 5) 佐藤園, 河田哲典, 李璟媛, 関川華, 篠原陽子 (2018) 岡山大学教育学部家政教育講座における中等家庭科内容論の実践と「教科内容構成力」の育成―教科教育と教科専門の統合を目指す家庭科カリキュラム構築の試み―, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録第 167 号, 61-77
- 6) 佐藤園, 篠原陽子 (2023) 岡山大学における初等家庭科授業研究・内容研究の実践と「教科内容構成力」の育成―コロナ禍におけるオンデマンド授業の実践と評価―, 日本家庭科教育学会中国地区会共同研究報告書, 95-108
- 7) 岡山大学教育学部 (2023) 教育実践力育成のための学びの航跡 教職実践ポートフォリオ
- 8) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説家庭編
- 9) 森千晴, 久成三有紀, 李璟媛, 篠原陽子 (2025) 岡山大学教育学部家政教育講座における教育実践力向上にむけた新カリキュラム初等家庭科指導法基礎および内容基礎の実践と評価―2024 年度指導法基礎受講学生を対象としたアンケート調査の分析を通して―, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録第 189 号, 111-122